

平成29年12月5日（火）

○議長（岡 弘悟君）休憩前に引き続き会議を開きます。

日程に従い、一般質問を行います。

順番10、4番 今城君。

〔4番（今城敏仁君）登壇〕

○4番（今城敏仁君）議長のお許しを得ましたので、壇上からの質問をさせていただきます。

このたびの台風21号の長雨は、過去に経験したことのない水量で、各地に大きな被害をもたらしました。被害を受けられた皆さまには、謹んでお見舞い申し上げます。被災された方々と被災地域の日も早い復旧を、心よりお祈り申し上げます。

我々住まいしております高野口も、先ほどの危機管理監の答弁の中にも浸水が1件あったのと、いつものことですが、垣花の樋門のところが問題になります。それと、田原道で1件の崖崩れがございました。それこそ北部のほうもため池、また、応其平野には引の池という大きなため池がございましたので、今後、どのような天災があるかもわかりませんので、区、自治の防災会、関係団体との連絡を密にとることが重要ではないかなというふうに思います。

辻本議員のほうから前段は短せえよということございましたので、ただ、せんだって、経済建設委員会のほうで広島尾道市と岡山県の笠岡市に行政視察に参りました。広島尾道市では、空き家対策についての勉強をさせていただき、笠岡市では、耕作放棄地の勉強をしてみました。これからは今回の行政視察で得たことを糧に、また市政のほうに反映していきたいというふうに思います。それと、尾道ラーメンも食べてまいりました。

しょうゆベースの豚骨で、藤田君に連れていただきまして、おいしいラーメンを食べてまいりました。

それと、尾道市なんですけども、行くにあたりちょっと調べましたら、この地域とすごく関係がございまして、尾道というまちの始まりは、あの地域は平家の時代に大田荘という荘園やったそうでございます。その荘園を、それこそ後白河天皇に平家がお渡しして、その後白河天皇から高野山領になったということでございます。高野山へ、瀬戸内海を通過して和歌山に来て紀の川を上がって、こちらのほうへ米を運んだと。そういうところから始まったのが尾道市と、尾道村と言うたそうですけども、らしゅうございます。雑学でございます。すいません、これぐらいで前段を終わらせていただきます。

今回の質問は1問でございます。

地域の活性化についてということで質問させていただきます。

①地場産業の振興について。

橋本市地場産業振興センターにブランド推進室が27年4月にでき3年目を迎えますが、チーム橋本としてさまざまな取り組みを行っていただいております。これまでの取り組みと、今後の活動についてお伺いたします。

以上で壇上からの質問を終わります。

○議長（岡 弘悟君）4番 今城君の質問、地域の活性化に対する答弁を求めます。

経済推進部長。

〔経済推進部長（笠原英治君）登壇〕

○経済推進部長（笠原英治君）地場産業の振興に関する、これまでのはしもとブランド推進室の取り組みと今後の活動についてお答えします。

まず、はしもとブランド推進室は、平成27年4月に、官民が一体となって橋本市の地場産品や特産品をブランド化し、全国・海外に売り出すことを目的に設立され、橋本商工会議所、高野口町商工会、紀北川上農業協同組合、和歌県からそれぞれ1名、本市から臨時職員を含めて5名の計9名体制で、チームはしもととして互いの得意分野を生かしながら活動しています。

具体的には、産業振興基金を原資に、がんばれ橋本応援補助金を創設し、今年度の交付決定分を含め3年間で市内事業者の新商品開発や6次産業化に関する事業に30件、販路開拓に関する事業に24件の支援を実施しています。また、販路開拓・販売促進による地場産品のブランド化推進については、国内外の物産商談会、展示会への支援や企業間のマッチング調整を国、県、JETRO等と連携して行っています。

また、昨年度寄附額が1億円を超えた、ふるさと納税寄附事業では、毎年返礼品の品数を増やすとともに、一方で淘汰し、ニーズに即した地場産品の販売促進や魅力発信を行っているところです。

また、官学連携事業として、高野山麓はしもとインターカレッジ・コンペティションを開催し、大学の持つ専門的知識や学生の視点を活用させていただきながら地域の魅力づくりにも取り組んでいます。

今後の活動につきましては、産学官が連携し、引き続き「がんばれ橋本応援補助金」等による新商品開発・販路開拓への支援や、ふるさと納税の返礼品を通じた地域と地場産品の魅力発信などにより、市内の中小事業者、農業者の活性化、所得向上に取り組んでまいります。

○議長（岡 弘悟君）4番 今城君、再質問ありますか。

4番 今城君。

○4番（今城敏仁君）ありがとうございます。実は、これと同じ質問を27年の4月にさせていただきまして、そのとき市長にも答弁をいただきまして、一、二年、やはり3年ぐらいがかかるといっていただいてお答えをいただきまして、本当に私もずっと、時々ブランド推進室のほうへは伺っているんですけども、職員の方、一生懸命頑張ってくださいまして、チーム橋本と、また和歌山県と連携をとり、今、部長の答弁にもございましたように、それこそ、JETROであったり、国等との連携を行って、さまざまな形でいろんな取り組みをしていただいております。これは平木市長の公約にもありました、橋本市を世界へ売り出す、そして、平木市長の3本の矢の1本ではないかというふうに思っております。着実に成果を上げて、軌道に乗っておるというふうに理解をしております。

そこで、私の場合はやはり高野口の地場の産業について、若干お伺いしたいと思います。

まず、第1問でございますが、地場産業の振興ということですが、橋本市の地場産業といえば高野口のパイルが、まずはじめに頭に浮かびます。先ほど壇上で部長のほうから地場産品の魅力を発信と答弁がありました、高野口のパイル織物のすばらしさを、全国、また世界へ知らせ、発信するために、市はどのような支援ができますか。

○議長（岡 弘悟君）経済推進部長。

○経済推進部長（笠原英治君）壇上でもお答えさせていただいたのですが、紀州繊維工業協同組合や県、国、そして、この秋にJETRO和歌山支局が県庁内に誕生しました。そういったところと連携して、国内・海外への展示会の出店をマンパワーとともに、販路開拓の補助金等で支援してまいります。

16番議員のときにもお答えさせていただ

たんですけど、高野口パイルというのは非常に品質が高くて、いろいろな用途で使われている付加価値が非常に高いものでございます。そういったことを、SNSなんかを活用して情報発信していきたいと思っておりますし、何よりもメディア戦略なんかは非常に有効ですので、メディアの力もしっかり活用していきたいと思っております。

○議長（岡 弘悟君）4番 今城君。

○4番（今城敏仁君）ありがとうございます。そのとおりであろうかと思うんです。それこそメディアの活動といいますか、メディアを利用すると。きのう、部長のご答弁にもありまして、16番議員の質問にもあったんですけども、エコファーという素材の、高野口で質のいいものをつくっているという放送が、あれはNHK、いつでしたかね、10日ほど、もうちょっと前ですか。NHKの朝のニュース番組であったんですけども、ご覧になった方いらっしゃいますか。ありがとうございます。

本当に、私も四十数年この業界でいてるんですけども、エコファーというのは、その前は、それこそフェイクファーというふうに言うたんです。その前はイミテーションファー、やはり、きのうの部長の答弁にもありましたように、プラダというヨーロッパのブランドメーカーがリアルファーを使わないと。やはり環境、動物愛護に鑑みて、これからはエコファーやと。合繊を使って、テレビでは大野の機屋さんが映ってられまして、その後、その機屋さんから出ている、高野口の場合は織りと編みがあるんですけども、編み、メリヤス屋さんのほうでその生地を織って、その後、加工に出すと。そして、また戻ってきた生地を機屋さんのほうで、島精機さんのカッティングマシーンでカットして縫製に出すと。

そして、その工程をNHKさんが本当に熟練の職人さんがつくっているすばらしいもん

やというふうな形で広報してくれたので、いろんなところから、「高野口はすごいね」というふうにお褒めの言葉をいただきました。それまではお会いしますと、「高野口は昔はよかったんやけどな。もう今さっぱりやな」というふうなことが多かったんですけども、「高野口の技術力はすごいね」と、本当にすごいものをつくっているんですけども、それを発信する情報発信下手といいますか、そういうところであったので、今、ここへ来て、そういうふうな評価をいただくというのは、5番議員もそんなことを小原田の方が言うてたというふうにお聞きしました。やっぱりいいものが、これだけこの地域でつくられているのであるのであれば、もっともっと市民の方にも知っていただくことが大事ではないかと思うんですけども、その辺のところ、部長、いかがでございますか。

○議長（岡 弘悟君）経済推進部長。

○経済推進部長（笠原英治君）もちろん、市外、県外、国内、海外の方に知っていただくのは大事なんですけど、何よりも市内の方にまずこの商品のよさを知っていただく必要があるかと思えます。今、高野口の「裁ち寄り処」地場産業振興センターでは、そういった地場産品を展示・販売させていただいておるところでございます。

こういったものについて、お客さんをたくさん招いてご紹介、なかなかできない状況ではあるんですけど、ふるさと納税の中には市民の方もおられますし、今後、ホームページとかサイト、そういったネットも利用しながら、しっかり市民の方にPRして、またいろんなところのイベントでそういった商品も紹介させていただこうと思っております。せんだってのまっせのイベントでも、昨年から県立体育館で実施するようになったんですけど、この県立体育館の中でできることになったことに

よって、こういう織物の製品を雨にぬれずにご紹介させていただくことが可能になりました。そういうことで、非常にたくさんのお客さんも来ていただきましたし、販売にもつながったと思います。

○議長（岡 弘悟君）4番 今城君。

○4番（今城敏仁君）ありがとうございます。本当にそうやって地域の人に知っていただいて、地域の方がまた知り合いに「高野口はすごいものをつくってるのよ」という広報をしていただくと、1人が3人、3人がまた3人にしますとすごい数の人が、高野口の織物はすごいんやぞということを認識していただけていると思いますので、ぜひこれから、またこの地において、そういうふうな市民の方に知らしめてというか、知っていただくような企画も、それこそブランド推進室のほうで考えていただけたらなど、これは要望でございます。

それから、もう一つ、この秋も東京で、「ぷわぷわ展」があったんですけども、それこそこの素材を見ていると、ほとんどがやはり衣料のエコファーのほうが多くなってございます。やはり時代の流れはそういうふうにエコっていう、フェイク、偽物、ちょっとその前のイミテーションといたらちょっと安っぽく感じるんですけども、エコファーになれば、これからやはり、すごく高野口の品質のええ仕事をこなすところへ注文が私は多分来るのではなかろうかというふうに思います。

ここ20年のバブル景気といったら、今の若い人はわからないんですけども、バブル景気が終わって、その後のデフレ経済で、今の20年間で過ぎた1998年ぐらいから、やはり高野口は売り上げが落ち、だんだんと売り上げが減ってきて、きのう部長の答弁で47億円にまで下がっておると。昭和61年には600億円の年商があったのが、47億円まで下がったと。この20年で私は600億円から47億円と10分の1

になったんですけども、やっとここで底打ったなというふうに感じております。これからは底打てばもう上がるばかりですので、また業者等も努力して、これから高野口の織物を、47億円を60億円の売り上げ、60億円を80億円の売り上げ、80億円を100億円の売り上げに目標を設定して、また、ブランド推進室のサポートもいただきながら頑張っていただけないかなというふうに思っております。

それから、はしもとブランド推進室では、地場産品の販路開拓、販路促進の支援を積極的に行っているとのことですが、高野口パイル事業者の商業取引はそのほとんどがB to B、企業と企業の取り引きです。今後、B to C、企業と一般消費者、B to G、企業と行政へ一部移行していくべきだと思いますが、そのためには、最終川下商品を開発することが必須でございます。このことに対して、市はどのような支援ができますか。

○議長（岡 弘悟君）経済推進部長。

○経済推進部長（笠原英治君）今、お話のありましたB to B、いわゆる企業対企業の取り引きが、今の高野口のパイル事業者では主流になっております。こういうことを言うと非常に失礼かもしれませんが、企業対企業、問屋さんとの取り引きであれば、かなり製品が良いのにもかかわらず、ある程度のロットでないと出荷できないとか、値段も非常に値踏みされることが多いというようなことを、私も聞いたことがあります。そういう中で付加価値の高い最終商品を、川下の商品を開発して、B to C、企業対一般消費者相手に商売をするということは非常に大事ですし、できれば事業者の方にそういう気持ちを持っていただきたいというふうに思っております。

B to Cに取り組んでおる具体的な事例としては、新商品開発で、きのうもお話させても

らいましたチェアパッドであったり、猫型クッション、こういうようなものを川下商品として開発して、ネットで本当に完売状態になっております。市としてはそれ以外の事業者に対しても、商品開発とか販路開発のための資金の一部支援であったり、アドバイザーの紹介、デザイナーの紹介、そういったことを積極的にしていきたいと考えています。

以上です。

○議長（岡 弘悟君）4番 今城君。

○4番（今城敏仁君）ありがとうございます。

また、その辺のところをもっともっとバックアップしていただきたいというふうに思います。

そこでなんですけど、地場産業の伝統産業の振興という課題に対しまして、後継者の技術継承、人材育成ということで非常に悩まれていると聞いております。高野口パイルの織物事業者もこれと同様、職人の技術の継承を非常に悩んでいます。これら職人の技術は一子相伝が最もふさわしいものですが、今の時代、技術をビッグデータにしてAI等で引き継いでいくことができると思いますが、その辺のところはいかがでございますか。

○議長（岡 弘悟君）経済推進部長。

○経済推進部長（笠原英治君）私もAI人工知能についてはそんなに詳しくありませんし、情報もまだたくさん得ていないわけなんですけど、確かに世界的にAI技術が進歩して、何十年もかかって取得した、いわゆる職人の技というものを全てデータ化して、それが数年の間で継承できるような、そういう状況になり得るということを聞いたことがあります。こういうビッグデータをしっかり入力していくのは大変でしょうけど、これだけ人材不足になって、特にこの伝統産業の部分でそういった担い手が不足している以上は、いわゆるコンピューターに頼っていくのも一つの部分だ

と考えております。そういったところから、必要な費用とか、今後、条件とかを研究していきたいなというふうには思っております。

○議長（岡 弘悟君）4番 今城君。

○4番（今城敏仁君）ありがとうございます。

それとやはり、先週もちょっと大野にある機屋さんに言ってきたんですけども、おじいちゃんの代に開業して、その息子さん、そして孫さんが今やっているんですけども、昔でいう働きに来てくれる職人さんがいないという、やはり20年の間のロスというのが、人も高齢化しましていてないという悩みもございました。これは行政のほうはどうこうするという話ではないかもわかりませんが、やはり熟練の職人さんも高齢化しておるし、ぜひ若い方がこういうふうな織物に興味を持って、働いていけるような後押しできるような施策がありましたら、お教えいただきたいというふうに思います。

それと、長期総合計画案を見ておりますと、地場産業の後継者育成学校の開校、体験学習メニューの開発実施というふうになっておりますけれども、この辺はどういうふうなことを企画、予定されてございますか。

○議長（岡 弘悟君）経済推進部長。

○経済推進部長（笠原英治君）長期総合計画の部分の、多分、商工支援と観光支援というところであったと思います。一つ目の商工支援については、先ほどもお話をさせていただいたように、伝統産業については非常に後継者不足になっておりますので、今、パイル織物の関係もそうですけど、紀州のへら竿もそうです。そういったところの後継者支援をしっかりとしていくように努めたいと考えておると、あと、それらを先日立ち上がりしましたDMOを利用して観光商品として、例えば、工場見学であったり、機織りの体験であったり、そういったものをメニューとして取り入れて、

しっかり皆さまにその良さを周知していきななというふうに思っております。

○議長（岡 弘悟君）4番 今城君。

○4番（今城敏仁君）ここにあったのは、学校の開校ってなってたんで、そういうふうな学校を、これは地場産業の経営基盤の強化というところの一番下のほうにあったんで、そういうふうな特別なカリキュラムを組んだ学校をつくるのかなと思ったんですけども、そういうふうなことではないということですね。

○議長（岡 弘悟君）今城議員、長期総合計画の中身に入り過ぎていきますので。

○4番（今城敏仁君）はい、わかりました。そしたら、次の質問に移ります。このブランド推進室の職員は、地元事業者のために積極的に販路拡大、販売促進の成果を出しつつありますが、その成果を正しく評価して、職員の処遇に反映できていますか。やる気につながる評価と処遇が大切だと思いますが、その辺のところはいかがでございませうか。

○議長（岡 弘悟君）ちょっと今城議員、通告外ですね。

○4番（今城敏仁君）はい。これで2回目でございます。というのは、やっぱり先ほど言いましたように、普通の企業ですと、目標を決めて、今、例えば、47億円の売り上げを、2年、3年で60億円にすると。60億円にするためにどういうふうな計画を立てると。行政の場合は、単年度、また2年、3年で変わりますので難しいかもわかりませんが、やっぱりそういうふうな計画を立てて、それに向かっているんなサポートをしていくということも大事なことではなかろうかというふうに思いますので、通告外ということですので、次の質問に移らせていただきます。

地場産業の振興と観光振興は非常にかかわりの強いセクションだと思います。先日、D

MOの設立が発表され、観光振興に市も力を入れていくと思われまますが、橋本市のパイル織物等のPRにつながるような観光商品の開発は可能とお考えですか。

○議長（岡 弘悟君）経済推進部長。

○経済推進部長（笠原英治君）先ほども答弁させていただいたんですが、DMOの観光商品の中に、必ず地場産業の振興という部分をしっかり組み込んでいきたいと思っております。例えば、先日、商工会議所がモデル的な観光メニューとして、実際、大阪の方を招いてした中に、パイル織物でつくった縫いぐるみの製作体験、自分で綿入れをして、最後に目と口をつけて、本当に目と口をつけることによって完全なオリジナルな商品ができるんで、非常に喜んでおられました。そういったことであつたり、可能であれば、国会議事堂の椅子の生地であつたり、新幹線ののぞみの生地、こういったものの製作現場を見ていただく、こういうのも非常に外国人にとっても、訪日観光教育にもなりますし、観光商品につながってこようかと思っております。そういったメニューを組み合わせ、しっかり構築していきたいというふうに思っております。

○議長（岡 弘悟君）4番 今城君。

○4番（今城敏仁君）1問ですので、だいたいこれぐらいの質問で終わりたいと思うんですけども、せんだって、きのうも部長の16番議員への答弁の中にもあつたんですけども、「ほぼ日手帳」、Japanese Fabric 高野口パイル 花絨毯、ほぼ日手帳2018年と、これは糸井重里さんがプロデュースしている手帳、日刊新聞ですかね、そこがプロデュースしている手帳カバーなんですけども、これ、うちの娘から連絡が来まして、「お父さん、高野口の織物ってすごいね」というふうに連絡が来ました。そこで、ホームページから見ますと、2018年度のこの手帳ケ

ースに高野口のパイル織物が、それこそ採用されたということでございます。ちょっとここに書かれていることを紹介させていただきます。

高野口パイル花絨毯。日本にはその土地ならではの気候や風土により生まれた生地が数多くあります。ほぼ日手帳2018では、そうした生地から三つの手帳カバーをつくりました。花絨毯はふんわりとやわらかくさわり心地の良い手帳カバー。和歌山県高野山の麓でつくられる高野口パイルという織物を使っています。パイルというとタオルを連想する方が多いかもしれませんが。ですが、この手帳のカバーのパイルは、タオルのようにループ状ではありません。2枚の布を向かい合わせにして、そこに糸を通し平行に切り離すことで、布地から糸が生えているような、ふんわりとやわらかくさわり心地の良い独特の織物ができ上がります。この花や葉の図案は地元の紋屋さん、パイルの模様を決める型紙をつくる会社が10年ほど前に考案したものを、ほぼ日手帳

カバーに合わせてアレンジしました。クラシックな柄をナチュラルな色合いで表現したら、こんなにかわいい生地ができ上がりました。清流紀の川の近くにある工場で、織りから染め、仕上げに至るまで職人さんの繊細な技術によって生み出される高野口パイル。日本の生地の品質の高さを感じてくださいと、こういうふうに書かれております。

これはロフト等で売られている商品ですが、これが日本国中に行って、高野口のパイルが高野口パイルとして売られているということ。先ほどのエコファーもそうですけども、本当にいいものがつくられているということ。皆さんももっとわかっていただいて、PRしていただけたらなということでございます。

以上で終わります。

○議長（岡 弘悟君）4番 今城君の一般質問は終わりました。